

西南シャントゥール事始

「ジュリアン」の夢

1954年、朝鮮戦争が終わった翌年、かのマリリン・モンローが在韓米軍訪問の途中、福岡に立ち寄った頃のことである。当時、因幡町には乙藤成美君(54期)の実家の家具屋店(現在の天神ジュンク堂)があり、その一階、家具倉庫の片隅に一坪位の狭いところにテーブル、棚にはウイスキーの瓶が数本、その上には乙藤君手作りの*「ジュリアン」の文字の板が掛けてあり、我々 豊田佳日子(53期)、乙藤、内海(54期)の三人はそこに集まって夢を語り合っていた。そのうちグリーには同期生が15人もいるし卒業後も合唱を続けよう、ということになった。

先輩の福永陽一郎さん(藤原オペラ指揮者、日本初のプロ男声合唱団「東京コラリエーズ」の指揮者)に相談すると「社会人の男声合唱は難しいよ」と言われ、合唱連盟の米倉美恵先生からも「OBの男声合唱は大変ですよ」と忠告を受けたが、我々は若気の至り「ヤルしかない」と皆に呼びかけた。

*「ジュリアン」：スタンダードの「赤と黒」の主人公で賢明な美青年の名前

シャントゥール発足

先輩や現役学生の希望者も入れて40名程になった。早速、発会式ということで、中洲の「サッポロビール」で気勢を上げた。

次に団の名前を、ということになった。当時、米軍の雑誌に海軍の Sea Chanters (舟歌 Sea Chanty を歌う者、シーシャンターズ) という50人位の男声合唱団の写真が載っていた。又、兄がシャンソン好きで、フランスに Les Companion de la Chanson 「シャンソンの友」という小気味よい歌を歌う小編成の男声合唱団があるのを知り、これにしよう! ということで「シャントゥール・ドゥ・ラ西南」の名前で、発会式をすることにした。(名前はその後「西南シャントゥール」に変えた。)

(1954年卒 内海 敬三)

委嘱初演作品リスト

- | | |
|--------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 多田武彦 作曲 | 男声合唱組曲「思ひ出」のち改題「柳河風俗詩・第二」(1994年)
男声合唱組曲「三崎のうた・第二」(1997年) |
| 吉田悠作 編曲 | 男声合唱組曲「中也の雨衣」(2012年)
日本の歌による男声合唱のためのメドレー「海へ山へ」(1996年) |
| 宇野正寛 編曲
大島ミチル作曲 | 男声合唱とハープのための「アイルランド民謡」(1997年)
男声合唱曲「日本の歌メドレー」(2000年)
男声合唱とピアノによる「生命的誕生」(2004年) |
| 信長貴富 編曲 | 「悲しい歌はきらいですか」(NHK「御宿かわせみ」主題歌男声合唱版)
男声合唱曲「時代へニューミュージックと呼ばれた歌たち~」(2007年) |

1年間の演奏活動

2018.10.20	西南シャントゥール第41回定期演奏会	アクロス福岡シンフォニーホール
11.10	心身障がい児(者)療育訓練施設「やすらぎ荘」ボランティア・コンサート	筑前町・やすらぎ荘
12.22	福岡女学院「メサイア」コンサート(有志参加)	アクロス福岡シンフォニーホール
2019. 1.19	2018年度通常総会	西南学院百年館(松緑館)セミナー室
1.27	白秋音楽祭り -童謡誕生100年記念- ゲスト出演	柳川市民会館
6. 9	福岡県合唱連盟福岡支部合唱祭	朝倉市総合市民センター・ピーポート甘木
7.05	西南学院大学同窓会出演	ソラリア西鉄ホテル
7.24	西南学院大学 チャペルサービス	西南学院大学チャペル
9.22	西南シャントゥール第42回定期演奏会	アクロス福岡シンフォニーホール
	西南学院グリークラブ創立100周年記念フェスティバル	



グリークラブ創設時のメンバー

The 100th Anniversary Festival



Seinan Gakuin Glee Club

2019

森の歌声 Wm. Henry Smith : 編曲

カントリーロード 弾 厚作:作曲 小池義郎:編曲

指揮: 中村賀亮 (23)

1st Tenor

中村 賀亮 (20)
播磨 透太 (22)
林 雄汰 (23)
藤野 博己 (23)

2nd Tenor

田上 宏樹 (20)
米崎 文哉 (22)
川本 和夫 (23)

Baritone

井上創次郎 (22)
野田 昇吾 (23)
伴 明宗 (23)

Bass

桑野イドリス (21)
桑原 航平 (22)
樋口 理一 (22)

合同演奏

男声合唱組曲 「月光とピエロ」 堀口大學:詩 清水 倭:編曲

客演指揮: 小久保大輔

作詩の堀口大學は父親が外交官だったので、大正4年頃マドリードに滞在し、当時有名だった女流画家で、詩人でもあった美貌のマリー・ローランサンと出会い、交友を深めていました。大學の心の中に淡い恋心が芽生えたのですが、9歳年上で人妻とあっては、かなわぬ恋でした。そんな悲しい胸の内をかかえた彼は、詩の中で自分をピエロに準えています。そして9年後パリでローランサンに再会した直後の仮装舞踏会で、大學は現実にピエロの姿で参加しています。曲に出てくる「コロンビヌ」や「ピエレット」は女性ですから、マリー・ローランサンの事を指していると思われます。

作曲は清水倭で男声合唱曲の最高峰と言われる古典です。

フィナーレ

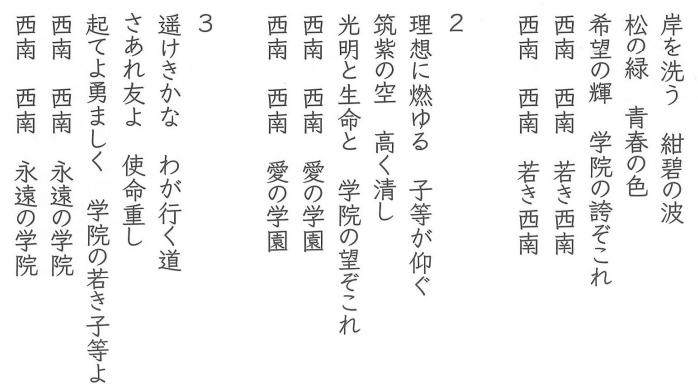
指揮: 内海敬三 (54)

いざ起て いくさびとよ

藤井泰一郎:訳詞 James McGranahan:作曲

西南学院校歌

水町義夫:作詞 島崎赤太郎:作曲 石丸寛:編曲



「いざ起て いくさびとよ」について

内海敬三(1954年卒)

「いざ起ていくさびとよ」の原詞はルーテル派のドイツ人牧師、ユストゥス・ファルクナーJustus Falkner(1672-1723)によるもので、神学者で讃美歌作家としても有名なドイツ人ヨーアヒム・ネアンダーJoahim Neander(1650-1680)が曲をつけています。

ネアンダーはルッセルドルフの渓谷で讃美歌を作ったりして広く人々に敬愛され、彼の業績を讃えてその渓谷はネアンダーの谷、即ちネアン・デルタールと名付けられた。1856年この谷から古代人の人骨が発見され「ネアン・デルタール人」として一躍世に知られるようになった。なお、ルッセルドルフにはネアンデルタール人の記念館がある。

現在、我が国の合唱団で歌われているリズミカルな曲は、アメリカのゴスペルの作曲家ジェームスマク・グラナンJames McGranahan(1840-1907)によるもので、教会で歌われているネアンダーの落ち着いた原曲とは異なる。作詞は当時の有名な福音伝道師 ウィットル Daniel Webster Whittle(1840-1901)である。ウィットルは ファルクナーが書いた讃美歌「Auf! ihr Christen, Christi Glieder」(起て!キリストを信する救いの子たちよ)の英訳を基に作詩をしているが、英訳は英国の女性詩人Emma Francis Vebanによるものである。アメリカのファースト・ルーテル教会のステンドグラスには、ファルクナーの姿とともに「Rise, Ye Children of Salvation」と彼女の英訳の詩がある。

このマク・グラナンの曲は戦前から同志社や関西学院で歌われていたが、1940年には英語禁止、1943年には米英音楽の演奏禁止政策が施行された。しかし西南学院では英文科教授でグリークラブ部長の藤井泰一郎が当時の状況下で言葉を選びながら日本語に訳し、戦争中も西南学院だけで歌い続けてきた。彼の日本語訳がなかったならば、この歌は戦争の混乱の中で永久に忘れ去られていたであろう。幸いにも今では全国の合唱団の定番曲として愛唱されている。

“Rise, Ye Children of Salvation”

(E.F.Vebanの英訳)

起て、汝等救われし子供等よ

頭なるキリストに忠実なる者は皆皆
目覚めよ、立ち上がり!おゝ力強き民よ敵が(聖地)シオンに攻め込む前に
高らかに力強き贊美を歌え海の雷鳴の如く
あがない主キリストの血によって
我々は勝ち得て余りあるのだ

『いざ起て、いくさびとよ』

(藤井泰一郎の訳詞)

いざ起(た)て戦人(いくさびと)よ

御旗(みはた)に続け

雄々しく進みて 遅るな仇(あだ)に
歌いて進めよ歌声合させて 潮(しお)の如くに
正義の御神は 我等の護(まもり)忘るな勲(いさおし) 我等の父祖の
統けよ同胞(はらから) 護れこの地を
歌いて進めよ歌声合させて 潮の如くに
正義の御神は 我等の護り



拍手とともに

指揮の他作曲、編曲、絵画と多才ぶりを発揮した石丸 寛は、西南グリー戦後復活の立役者でもある。1994年秋、腸にポリープが見つかり癌と判明した後もタクトを振り続け、同年行われた、西南シャントウール創立40周年記念演奏会でも、「シーベルト」と「黒人靈歌」を指揮、1998年3月23日颪爽と昇天された。享年76才。

このメッセージは1959年西南学院グリークラブの創立40周年記念演奏会プログラムに同氏が寄せたものの転載である。

石丸 寛



ひとくちに40年と言っても私の生まれた頃からだと思うと、心からおめでとうを言わざにはおれません。このながい間、関西の同志社グリークラブや関西学院グリークラブと共に、九州の西南学院グリークラブは立派な活動をつづけてきたことで知られています。

私も戦後の荒廃した中で、たまたま福岡に住んでいたおかげで西南グリーのイガグリ頭の学生さんでスタートした次第でした。旧校舎のレンガづくりの講堂で毎日のように陽が暮れて楽譜が見えなくなるまで練習しました。当時のグリーメン達は夜になるとなんなく私の下宿に集っていましたと音楽談義に花を咲かせ、夜道を菩提樹を歌いながら帰って行きました。

日一日とグリーメンらしく成長してゆく若々しい学生たちを見ていると、しみじみと幸福を感じ、私は寒い下宿の一部屋で睡れないこともあります。

音楽というものは、よく考えてみると何ものにも換えがたい不思議な宝です。それはダイヤモンドや大邸宅のように或種の人たちだけが持てるのではなくて、誰でも……全く誰でも自由に持てるのです。私たちの心の中にそれがしのび込んでくる時、またそれが一ぱいに心の中に溢れる時、こんなに美しい宝を持ち得る人間ということに深い感謝をさせたくなります。職業としている音楽家もアマチュアの音楽家も、或いは又、自分では何もしないで聴くだけの趣味の人も、交響曲からシャンソンやロカビリーにいたるまで、音楽によってどれだけ慰められ、豊かになり、生命力を得ているか、はかり知れないものがあります。

西南グリークラブはそのような音楽の美にあこがれる人のながい歴史一伝統を持っている立派な団体です。これはいつまでも伸ばしてゆかねばなりません。つまり金ボタンの制服を着ている間だけの音楽であっては意味がないのです。その意味から古い大先輩も含めての今回の40周年記念演奏会に私は心から拍手を送りたいのです。おめでとうございます。

予告



西南学院グリークラブ 第63回定期演奏会

- 2019年12月21日(土)
- 西南学院大学 チャペル



西南学院グリークラブと私

1990年2月福永陽一郎は63才の若さで逝った。

これほどまで純粹に音楽を愛し、アマチュア音楽家達を鼓舞指導した情熱は、あの細い身体の何処から生まれるのだろうか。今でも合唱ファンを魅了して止まない。

このメッセージは1989年西南学院グリークラブの創立70周年記念演奏会プログラムに同氏が寄せたものの転載である。

福永 陽一郎



私が、西南学院グリークラブの定期演奏会を指揮したいつとう最初は、創立40周年の演奏会だったと思う。戦後の西南グリー再建の恩人である石丸寛氏の指揮が予定されていたのが、ご本人の都合で駄目になり、私にそのオハチが回ってきたという事情であった。

戦争前のことになるが、私は中学生だったので西南学院(当時、専門学校だったのに)グリークラブの定期演奏会に出演したことがある。あれは昭和17年だったか、演奏会の刺身のツマミに、ワニステージピアノ独奏をしたのが最初である。この時、私は初めてギャラというものを貰った。丸善の図書券で5円だった。その当時の5円は大したもので、豪華な表装の「ブルームス伝」等が2冊買えたものである。

次の年、西南学院グリークラブの戦前最後の定期演奏会となったコンサートで、私はピアノ伴奏を引き受けた。プログラムの最後を飾ったのが、グノー作曲、歌劇「ファウスト」からの「兵士の合唱」で、歌う者も聴く者もこれが最後だと覚悟しての、涙、涙のステージであった。

戦争に負けて、グリークラブの面々も何人か欠けてはいたが、ばつばつ帰郷してきて、何となく講堂(現・高校講堂)に集まった十人。細々と声を上げていたのを、自身も帰郷途中の石丸寛氏が聞き留めて、2階への階段を昇った。これが西南グリーの復活物語である。

東京で音楽の勉強をしていた私が、事情あって家のある福岡へ帰ったのが、昭和23年だったか。西南学院大学の神学部に編入され、本式に大学生になって、晴れて憧れのグリークラブの団員になった。約1年間のことでのこと(史実?)のお陰で、今も西南学院グリークラブの先輩の扱いを受けている。

創立40周年から創立70周年まで、考えてみると私の半生は、西南学院グリークラブと共にあった。そういうことになる。

中学時代を過ごした福岡に、母も亡くなり姉も移住して、もう我が家は無くなってしまった。帰るという言葉も虚しいようなものだが、毎年、西南学院グリークラブの定期演奏会のために福岡に行くチャンスを与えられて、今でも帰郷という気持ちで出かけてくる。

「ふるさと」がある、という事実を与えてくれる西南学院グリークラブに、改めて礼を言いたい。



昭和・平成の危機と復活

刀根 亨一(1948年卒)

1929年生まれの私は、2019年9月現在90歳と半年になる。

奇妙な縁とでもいいうか、西南学院グリークラブの戦後の復活、そして平成の2度目の復活に關係した者として、この機会に書き残しておこうと思う。

「カチューシャ」は戦後復活の産声

昭和20年8月戦争が終わり、学徒動員や兵役に狩りだされていた学生たちが次々と復員、学内は次第に活気を帯びてきた。その頃、昭和18年から戦時体制で解散状態にあったグリークラブを復活してはどうかと、藤井泰一郎先生(「いざ起て いくさびとよ」の詞譜者)から二人の2年生に相談があつた。それから部員募集が始まり、校舎の壁や校庭の松林に貼られた物珍しいポスターに惹かれて、私も含めやっと10名の部員が集まつた。

それから、12月に戦後最初のクリスマス行事が開かれることになり、早速グリークラブに演奏の要請があった。10人の内9人は楽譜が読めない、唱を歌ったことも無い青年たち。頼みの綱は復員したばかりの先輩たちの指導だった。その様は、親どりが子供に口移しに餌をやるようにパート毎に歌を口移しされ、他のパートの音を耳に入れずに自分の歌を歌いなさいと教えられた。

当時の講堂(現ドージャー記念館)のステージで足を震わせて歌った曲は、「胸のただ中」と「権兵衛が種まく」の2曲。あつという間に我々の初コンサートは終わった。なんと恥ずかしかったことか。このグリークラブがそれからわずか1年半後、昭和22年6月、戦後第1回の朝日合唱コンクールで優勝するとは、誰が想像したであろうか。事実は小説より奇なり。指揮者石丸 寛氏との出会いにより、西南学院グリーは優勝を果たしたのである。

東京から筑豊に疎開していた石丸氏は終戦で福岡市に出て来た。昭和21年の或る日、渡辺通りの音楽事務所(グリー先輩の経営)に石丸氏が現れ、ライラック合唱団(グリーOB中心の混声合唱団)に入れてほしいと申し出た。当時私達グリーメンの一部はライラックに入り勉強中であったから、入団が決まった石丸氏と一緒に歌うことになった。

能ある鷹は爪を隠す!石丸氏は当時24才。東京の文化学院在学中に当時の俊英指揮者山田一雄氏に師事、指揮法を学び幅広い音楽の知識があることが忽ち判り、ライラックは水面下で騒然となった。

指揮者がいなくて困窮していた私達グリークラブにとって、石丸さんは(ここから親しみを込めてさん付け)垂涎の的だ。先輩と相談し、石丸さんはグリークラブの指揮をお願いし了解を得た。これが石丸さんと西南グリーの運命的な出会いである。こうして、我々は石丸さんから沢山の音楽知識や技術を学び、石丸さん独特のほほばしの情熱(パッション)を感じ取った。第1回朝日合唱コンクールの自由曲「カチューシャ」、第2回の自由曲「セントペテルブルグへの途上にて」は何れも輝かしい優勝曲として、グリーの歴史に刻まれた。特に「カチューシャ」はグリークラブ戦後復活の産声である。

そして、グリークラブの復活と発展のためひたすら努力した3年生(48期生)の卒業と共に、石丸さんは西南グリーの指揮を辞めた。しかし、その後も「Ah Seinan」などの作曲や客演指揮など、後輩に変わらぬ支援を惜しまなかつた。

その後石丸さんは九州交響楽団を立ち上げ、上京してからは「題名のない音楽会」「国技館5,000人の第九」など華々しく活躍された。私等在京の復活メンバーは時々石丸さんと会食をして交流を絶やさなかつた。そして、私が退職し平成3年東京から福岡に転居した後、平成6年、病後の石丸さんが西南シャントワール40周年記念演奏会で客演指揮をされた。さらに平成9年、九州交響楽団の定演で「ブームスの4番」を振ったアクロス最後のステージと、楽屋で別れる時の石丸さんのはほ笑みが忘れられない。

平成の復活奮戦記

平成10年頃までは立派な演奏を聴かせてくれていたグリークラブのメンバーが3、4人に減つていて知ったのは平成17年の初めだった。これは何とかせねばと思い私は動き出した。“義を見てせざる



は勇なきなり”先ずはOB合唱団シャントワールを訪ねグリーの対策について話合つたが、ポジティブな意見は得られなかつた。

平成18年1月8日、グリーの定演を聴きにふくふくプラザに行く。現役の出演は一人と聞いた。なんと寂しいことよ! 終演後樂屋を訪ねOB指揮者のK君と話す。これまで手を尽くしたが、グリーの復活は難しいと言う。この時点で部員は「零」となつた。以来シャントワールも卒業式、入学式でグリーに替わって演奏するようになった。シャントワールの練習場所を週一回学内の教室に移し、全ての学生に届けとばかり歌声を響かせた。これらを、西日本新聞の鎌田記者が記事にしてくれたので方々で話題になつた。

▷ 6月28日、グリークラブOB会総会で図らずも会長に就任する事になった。

「グリークラブの復活」と「OB会組織の強化」を活動方針とし会員一同の協力を要請した。

▷ 7月15日、チャペル建て替えで開催された「ありがとうランキン・チャペル」に230人のOBが集まつた。学院側からも寺園院長はじめ関係者が揃い、あたかもグリー復活決起大会の様相を呈するに至つた。これを機に院長と武井先生(グリークラブ部長)には長年ご支援を頂くことになった。

平成19年、部員募集は学生だけに許された活動としてOBの介入を許さなかった学院側も、学生部員がいないグリークラブとボート部のみOBのみによる部員募集を認めた。この年の春は早速校庭に机を出しOBで募集活動をした。3人の入部希望者がいたが結局獲得できず、現役部員零が響いた。

平成20年3月、突然、私の妻真理子に宮崎大学附属中同期の綾部さんから「息子が西南に合格した」と電話があった。妻はとっさに「宮崎に行きましょ。息子さんをグリーに入る為に」と言った。妻はついでに宮崎の高校を部員勧誘に回ろうと言う。妻の恩師で宮崎合唱界の重鎮、長谷場先生にお願いして4つの高校の先生を紹介頂き、2日に分けて訪問した。巡回の車は妻の友人と、グリー58期OB坂東忠男君のご協力を頂いた。感謝!

先ずは肝心の綾部君のお父さんと日向学院で会つた。「グリークラブに是非、匠馬君に入つて欲しい」が私の第一声。妻は「入学式がすんだら、うちと一緒にご飯食べましょ。」と言つた。高校訪問は大山鳴動……になったが、クラブの部員ならば推薦で入れて頂きたいというのが全校の希望だった。

▷ 4月2日、入学式の翌日、綾部君が親父さん立ち合いで入部申込書に署名した。復活第1号である!

▷ 4月5日、男子寮「碧波寮」でもシャントワールがデモ演奏し部員勧誘を行つた。終了後管理人の松崎さんと話したら「僕は工学院大学で合唱をやつてたんです」と言う。後日、佐藤棟也君(シャントワール指揮者)と碧波寮を訪ね松崎さんと話す内に、昭和30年代大阪の三井ビルで彼も私も働いていたことが判り意氣投合した。

10日後、松崎さんから「寮生が4入りそうだ」との連絡があつた。

▷ 4月27日、初めて5人のメンバーが揃つた。学生5人とOB12人で前途を祈念し祝杯を挙げた。『為せば成るが為さねばならぬ何事も』

▷ 5月13日から碧波寮を借りて、佐藤君とOBサポーターのパート別指導で練習を開始。どう焼き、ミカンなど持参し練習を見守つた。

▷ 8月3日、一期生と佐藤君を自宅に招き妻の手料理で歓迎会を開く。この歓迎会は妻の肝いりで平成27年の入部者まで続いた。各自に梅が枝餅を作らせた時は、焼きあがると歓声を上げ2、3個は頬張つていた笑顔が忘れない。大学に入って初めての部活の仲間。長い絆になれば幸いだ。

平成21年9月19日、OB会主催グリークラブ創立90周年記念フェスティバルを開催した。OB参加者250名と一緒にニューグリーメン6名も晴れてステージに立つた。

▷ 11月、指揮者交代。佐藤君から江川靖志氏(3年間)へ、そして堀ミナ子氏(3年間)にご指導いただく。更なるレベルアップを目指し外部指導者の力もお借りした。

平成22年4月、3人入部しメンバー8人になる。

▷ 12月15日、8名お披露目リバイバル(復活)演奏会。フラウエンコールの賛助出演に感謝。

平成23年6月、メンバーも11人になり先ずは道筋がついたので、会長を退任することにし、後任は河野正海君にお願いした。この復活にお力添え頂いた皆々様に心より御礼申し上げます。